特集　緑蔭図書紹介

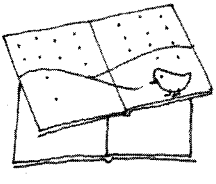
生活・平和・いのち

―沖縄からの本の紹介―

吉葉研司

那覇から船で一時間ほどの所に渡嘉敷島がある。この島の阿波連小学校を舞台にした、灰谷健次郎の絵本が『先生はシマンチュ一年生』（灰谷健次郎文　坪谷令子絵　童心社　二〇〇三年　現在重版未定）だ。「シマンチュ（島人）」は、灰谷の言葉を借りれば、「島でくらして島の友達を大事にしている人」のこと。関西から来た教師と島の子どもたちのふれあいを活き活きと描いている。

四月、渡嘉敷島はヤマモモの実がなる季節、しかしそれはハブに注意しなくてはならない季節だ。



「ヤマモモの実が赤くなってくると、ぼくらはハブに気をつけます」

「うん？　ヤマモモの実をたべるの？　ハブが」

たべない、たべないと、みな、わらいながら　口ぐちにいった。

「ヤマモモの実をたべにくるトリを、ハブがねらうんです」

「ほう」

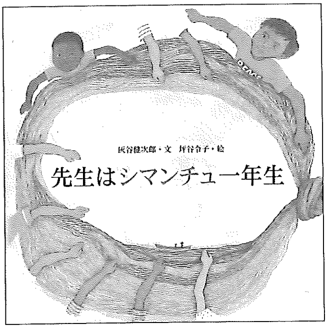
「下から見て、くろぐろとしたものが　目には
いったら、それは　ハブが木の上で、とぐろを
まいていると思ったらいい」（十六頁）

渡嘉敷で生活している子どもたちからすれば、ハブは敵視するものではない。その気のつけ方は渡嘉敷で息づいた生活の知恵から学んでいく。これを生きる力と呼ぶのであれば、学校の先生ですら、その地域で、一から学び直さなければならない。

この絵本では、人がさまざまな自然とかかわり、島の人々とかかわりながら生活することを「生活の豊かさ」ととらえているようだ。この生活の豊かさが子どもたちの知的好奇心をくすぐり始める。

「海には、ふしぎが　いっぱいある。カヤをつっ
てねる魚がいるけど、しってる？」
先生は、また、きいた。
「はい」
ぼくは手を上げた。……（中略）

「アオブダイは、口から、ねばねばのえきを出し
て、じぶんのからだをつつむ　ふくろを　つくる
ねん。そこへはいって　ねてる」
「きみは、それを見た？」
「うん。おじいちゃんと　でんとうもぐりにいっ
て、見た」……（中略）
「すごいなあ」
先生は、ぎゅぎゅぎゅっと、ぼくを見た。（三十頁）



生活の豊かさから立ち上がる知的好奇心、その好奇心の中で出会う「ぼく」と「先生」、真の学びの中ではぐくまれる人間関係の豊かさ、生活から学びを立ち上げること、子どもの生きる

今を大切にすること……。渡嘉敷島に移り住み、シマンチュ一年生から始めた灰谷氏自身の想いが、そこに描かれている。

　渡嘉敷島にある、渡嘉敷幼稚園の新垣光枝教頭は一九七四年の開園当初から、渡嘉敷幼稚園で地元の幼児の成長をみつめてきた。いわば、渡嘉敷のお母さんだ。先生の縁者は渡嘉敷島の集団自決を経験している。「生き残った人々がいなければ、私はここに居なかったのです」、先生の言葉が胸に刺さる。

　渡嘉敷で起きた戦争の歴史を、平和のために風化させてはならないと、光枝先生は、園児と共に、島に在住する集団自決で生き残った方々から戦争体験を聞き取る取り組みを続けてきた。重く口を閉ざしてきた島の方々も、時を経て、光枝先生と子どもたちの前で語り始めた。島で共に生活してきた娘のような光枝先生の前だからこそ語れたのだろう。

　この体験談をもとに、子どもたちが感想画として絵を描き、『慰霊の日せんそうのこと[注1]』という手作り絵本を作ったのが十二年前、以後、年に一冊ずつ、十三冊の絵本が作られている。出版はされていないが、渡嘉敷幼稚園の本棚に置かれている。光枝先生は二〇〇九年三月をもってその三十五年の教員生活を終えた。

　光枝先生の「私が生きている」という言葉は沖縄の人々の共通の言葉であろう。『いのちのまつり「ヌチヌグスージ」』（草場一壽作　平安座資尚絵　サンマーク出版　二〇〇四年）は、沖縄に根付く、命のつながりを題材にした絵本だ。「ぼうやにいのちをくれた人は誰ね～？」、男の子がオバアに聞かれて考え始める。

特集　緑蔭図書紹介

「ぼくにいのちをくれた人、2人」
「お父さんとお母さんにいのちをくれた人、4人」……（中略）
「そのまた上に……」（十九頁）

さて、どのくらいの数になるのだろうか？　オバアが答える。

「オバアにわかるのは、数えきれないご先祖さまが誰ひとり欠けても、ぼうやは生まれてこなかった、と言うことさぁ～」（二十二頁）

膨大ないのちの数が、「ぼく」の目の前に地続きで広がっている。そしてそのつながりが一つでも欠けると「ぼく」は存在しない。「悠久の時の流れの中、広大無辺な生命のつながりが今ここにある」。「命どう宝」という命を大切にする思想や、沖縄の祖先崇拝という思想は、あの戦争体験を経て輝きを増す。

そして、沖縄の、今、ここにある話。「家でわらべ唄を歌うと、子どもが『悪い』言葉（方言）を覚えてしまう」と、口を閉じ、わらべ唄を歌えなかったオジイやオバアが沖縄には居る。介護体験で「同じ土地で生きてきたオバアの言葉がわからない」と涙した学生が沖縄には居る。そこに標準化を推し進める学力対策の弊害がある。それは沖縄の人々から生きる力を奪ってはいないのか。「根を育てる」という久保田浩[注2]の言葉をかみしめながら、そんな思いと日々格闘している。

（琉球大学教育学部准教授）

注
1　一九九六年～二〇〇九年（各年発行　未出版）
　なお、沖縄では沖縄戦終結の六月二十三日を「慰霊の日」と県全体で位置づけ、沖縄戦で犠牲となった人々の魂を慰め、反戦平和を訴えている。
2　『遊びの誕生』や『根を育てる思想』などの著作で幼児期と遊びの重要性を問題提起した教育研究者。